

平成24年度 石山プロジェクト **秋学期** 報告会

2月14日（木）第1講義室において、秋学期の報告会が行われました。

当日は、学生15名、石山小学校教員2名、石山幼稚園教員1名、助言者（退職女性校長会から派遣）2名、大学教員2名、計22名が参加しました。以下に、報告内容の概略を記します。

幼稚園グループ



園では、手回しごま、糸巻きごま、投げごま等、様々な種類のこまを用意しています。それは、より多くの子に「こまを回す喜び」を感じさせるためです。子どもたちには、発達、興味関心、器用さ、体力等において違いがあります。だからそれらに対応できる多様なこまが必要なのです。

先生方は、「ここでは、こんな力が付く。」「これが回せたら、次はあのこまに挑戦するだろう。」といった具合に、環境を綿密に整えておられます。子どもたちは、「どうやって回すの?」「こうするんやで。」「Aさん、すごい!」と会話しながら遊んだり、他者に認められることで自信をもったりしていました。私は、子どもたちと一緒にこまを回しながら、去年はひもを巻けなかった子が、今年は器用に巻いている姿にふれ、1年の成長を実感することもできました。

子どもたちは、自由に遊んでいるように見えますが、その陰には先生方の意図や努力があることを再認識しました。



なかよしグループ



学習支援について…子どもたちは、授業から授業へ、思考を切り換えて授業にのぞむことが難しい場合もあるので、先生方はいろいろと工夫されていました。例えば、教科の導入では、算数なら具体物、半具体物を使ったゲームや遊び、国語では紙芝居、というように教科に関係する活動を組み入れることで、興味関心を喚起させておられました。

子どもたちへの接し方について…子どもが、思い通りにできずにイライラしていたり、何かにずっとこだわっていたりした場合、先生が、「大丈夫?」と優しく接する時と、「ダメなことはダメ」と叱る時がありました。これは、それに至るまでの経緯や、その子の状況、周りの子との関係等を、総合的に考えた結果の支援だと思います。先生は、それを、その都度行っておられます。教育は“一対一対応”のような画一的なものではないということを知り、視野が広がりました。

私は、「子どもや学級の流れに、自分が入っていく」ことを目標としました。



それは、子どもの思いや願いはひた向きで、しかも繊細なので、自分の不用意な言動で子どもの意欲や学習を邪魔しては申し訳ないと思ったからです。そのように考えたら、自分が関わっていくことに緊張もし、不安もありましたが、子どもたちの優しさや明るさ、まじめさに触れるうち、自然にコミュニケーションがとれるようになっていきました。前期の普通学級サポーターの活動、後期のなかよし学級サポーターの活動。内容は違いますが、子どもの思いに寄り添い支援する姿勢が基本であることにおいて、何も変わらないと思います。

1年生グループ

「いち」「ねん」「せい」の音から連想する言葉をもとに報告しました。



「位置」(いち) …子どもたちは、先生には切り出しにくいことを、まず自分に言いに来ることがありました。「叱られないか。」「先生に言うべきだろうか。」といった気持ちからだと思います。だから、その子の話を共感的に聞き、その場で励ましたり、後で先生に報告したりするようにしていました。

学習や生活のことでわからない部分は、常に先生に尋ねるようにしていました。それにより、先生のお考えや学級・子どものこと等、多くを教えていただきました。サポーターの位置は、子どもと先生の間であり、そこにいるからできること、学ばなければならないことがあると思いました。



「粘」(ねん) …体育の時間に、大縄の中に、思い切って走り込むことができない子がいました。先生はコツを伝え、励ましておられましたが、その日は、縄に入れず終わりました。次の週の体育でも同じように、大縄の前で足が止まっていたのですが、先生は指導を続け、授業の最後によく中に入って跳ぶことができました。担任と子どもたちが、その子と一緒に大喜びしていた姿が印象的でした。子どもを目標に向かわせる時、教師の粘り強い支援が重要であることを学びました。



「勢」(せい) …授業中に隣の子と競うように手を挙げていた姿。体育の時間、図工、休み時間に全力で体を動かしていた姿。「1年生でも、これほど集中して活動できるのか。」と感心する場面によく出会いました。子どもたちには“勢い”があります。サポーターも、子どもたちに負けないよう、明るく楽しく活動することで、子どもたちをさらに輝かせたいと思います。

2年生グループ



生活科「おもちゃランド」では、1年生と一緒に楽しく遊べる場作りをしました。自分のすべき仕事を意識し、黙々と活動できたところに、子どもたちの成長を感じました。なので、私の支援のほとんどは、作業する時のちょっとしたコツをアドバイスする程度でした。しかし、中には、活動が停滞気味な子もいましたので、「1年生のお兄さん、お姉さんだし、がんばろう。」と声をかけると、活動にもどることができました。

あれこれと注意するよりも、自分の立場を意識させることが、動機付けになることを学びました。



また、「おでんパーティー」では、班ごとにおでんの材料を決め、買い物に行き、調理しました。班内でよく協力し、やっと思える段階まで来た時の子どもたちのうれしそうな顔が印象的です。このような活動の際には、校外に出かけたり、刃物や火を使ったりするので、サポーターは安全面に特に気を配ることが重要だと思いました。

2年生の子どもたちは、何事にも全力で向かいます。サポーターは、その一生懸命さを受けとめながら、多くの子どもの助けになればと思います。

3年生グループ



学級の雰囲気は、学級により違います。例えば、活発な学級、落ち着いたのある学級、ユーモアのある学級といったようにです。そして、それは教師の持ち味と似通っていたように思います。教師の持つ影響力を再認識し、その責任の大きさを感じました。

子どもたちは、朝は読書に集中する。授業中は活発に挙手する。他者の発言は静かに聞く。音楽の時間には元気に歌う。体育では思い切り汗を流す。というように、けじめをつけて生活していました。このような学級では、集団にルールが存在し、教師の指導の規準が明確でした。そして、どの子に対しても、どんな時にでも、その規準がぶれないこと。また、それを地道に指導することが大切であると学びました。

半年間通うことで、個々の性格、得手不得手を把握することができました。それをもとに、個々の少しの伸びでも気づけたり、どこで困っているかを予想しながら関わったりできるようになってきました。また、「自分が子どもの立場なら、どうしてももらいたいのか。」「自分が担任なら、どのような子になってほしいか。」の二点から、支援を決め出すようにもなりました。

しかし、反省点もあります。それは、動物の絵を描く図工学習時に、「イルカの描き方を教えて。」と頼まれ、何も考えず、すぐに手元の紙に描いて見せたことです。それにより、その子は苦労せずにイルカの姿形を手に入れましたが、「Aさんが上手に描いていたよ。」とか、「図鑑に載っているから調べよう。」と応えればよかったと今は思います。その時々、どのような支援が子どものためになるのかを考え、実行できるよう努力していきたいです。



4年生グループ

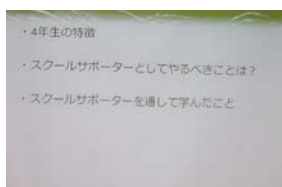


元気で、人なつっこい子が多く、毎回多くの元気をもらいながら楽しく活動することができました。でも、時々言葉遣いが乱暴だったり、授業中に関係のない話をしてきたりすることもあったので、その都度、直すよう声かけしてきました。

サポーターは2つの目線を持つべきだと考えます。一つ目は、「子どもの目線」です。この目線により子どもの心情に共感しながら関わることができます。ただ、子どもたちの中には、自分にはない感じ方、とらえ方をする子もいます。それは、子どもにより感覚・感性、考え方が異なるということだと思います。それらも受け留め、共感できるサポーターでありたいと思います。

二つ目は、「教師の目線」です。私は、おかしいと思った時には、「それはダメ!」「こうした方がいいと思う。」と自分の意見をはっきりと子どもに伝えてきました。それが、子どもたちの判断力を育てることになると考えたからです。

サポーターは学生ですが、子どもたちを導く存在であるという自覚を持ち、接していく姿勢が必要だと思います。



5年生グループ



休み時間に、子どもたちの遊びの輪の中に入り、一緒になって真剣に遊ぶことで、よい関係を築けたと振り返っています。一方、集団に入りづらい子がいて、こちらから話しかけるようにしましたが、最後まで楽しく会話ができなかったことが悔やまれます。「関わりを求めてこない子に、どのように関わっていくか。」が、今後の課題です。

授業中のサポートは、先生が子どもたちに出される指示をしっかりと理解し、そのねらいのもと、個別指導を行うよう心がけました。それにより、先生とサポーターの指導がずれないようにしてきました。

6年生グループ



中学校の教師を目指しているので、小中間での接続を円滑に行うためには、6年生にどんな力をつけなくてはならないかを考えながら活動してきました。

ある日、音楽の時間に、Bさんが、リコーダー演奏が下手なことを気にして涙していました。近くの子が、「先生、Bさんが泣いてるよ。」と伝えると、先生は、「もう6年生だから、泣いてはいけません。安心して中学校へ送り出せない。」と、言われました。さらに、「みんなにも、そんなところはないですか？」とクラス全体に問われました。他の子は、「Bさんと同じ弱さが自分の中にもある」といった表情で、うなずきながら先生のお話を聞いていました。自分の年齢や立場を意識させることが、有効な指導であると知りました。私は、Bさんのことを少し心配しましたが、先生は、その後、休み時間に話しかけたり、一緒に給食を食べたりしておられ、Bさんにも笑顔がもどっていました。細かな配慮があるから、厳しいことも言えるのだと学びました。



子どもたちは、中学校では教科担任制ということもあり、担任以外の多くの教師に関わらなければなりません。とするならば、小学校段階で担任以外の大人であるサポーターと関わる経験は、中学校生活への橋渡しに寄与するものであるとも思いました。

学生報告の後、滋賀県退職女性校長会（滋賀県梅の実会）、石山小学校、石山幼稚園の先生方から指導助言をいただき、秋学期の報告会は終了しました。

スクールサポーターの皆さん、ご苦労様でした。

お忙しい中、ご参会頂きました先生方、ありがとうございました。

